Aブロックの「space」ベスト5です。

いろんな意味があって、攻略法も多彩でした。
あなたなら、どの作品を推しますか。
そして東工大生が1位に選んだのは・・・？

答えは作品のあとの解説にてどうぞ。

宇宙からみても

「キーン　コーン　カーン」

チャイムが鳴り1限の宇宙の講義が終わった。
理系に進んだことをそれだけで後悔させてくれるような退屈な授業。
しかしこの講義は座席指定で、以前から好きだった里香ちゃんが横に座るため俺は毎週楽しみにしてこの講義を受けていた。

席を立とうとしたその時、里香ちゃんが話しかけてきた。
「ねぇ、宇宙の勉強をしていると宇宙は広いって事を痛感させられるよね。
宇宙から見れば人間なんて顔のない不特定多数でしかないんだよね。」
俺は何て答えて良いか分からず、ただ、そうだねと相槌を打った。
議論を好み、こんな風に自分の考えを臆することなく言える。そんな彼女が俺は好きだった。

2限以降、俺は彼女が言ったことをずっと反芻していた。
宇宙から見れば人間なんて顔のない不特定多数でしかない。確かにそうだ。
そう考えるとちょっとした事で悩んだりしている自分が滑稽に思えてくる。
人生1度しかないんだし宇宙から見たら自分が何をしようが大した事じゃないんだから思い切って放課後に里香ちゃんに告白してみようじゃないか。

放課後、俺は里香ちゃんを呼び出して言った。
「お願いします！　俺と付き合ってください！」
「えっ・・・ごめん。私、カッコイイ人じゃないとちょっと・・・」
思いのほかあっさり振られた。しかしここで諦めるわけにはいかない。
論理的に正しいと納得してしまうのが理系の女の子の特徴だ。
「なんでだよ？　さっき宇宙から見たら人間なんて顔のない不特定多数でしかないって言ってたじゃん。だったら俺がイケメンだろうが不細工だろうがたいした問題じゃないだろう？」
勝ったと思った。彼女の言ったセリフから根拠を持ってこられては彼女も折れずにはいられないだろう。俺が勝利の美酒に酔いしれていると、彼女は言った。
「だけど宇宙から見ても、最近の偵察衛星の解像度は凄いから
あなたが不細工って事はすぐ分かるわ。」

自分の考えを臆することなく言う。これだから理系女は困る。

A-6

うたかた

俺が中学のときの話をする。

そのころの俺はクラスの中でも何かと目立つ生徒だった。いわゆるどこのクラスにもいるお笑い担当みたいなやつで、年中馬鹿なことをやってはクラスを笑わせていた。男女問わず友達が多くて、祭り事があれば我先にと暴走するような、まぁ、そんな感じの生徒だった。

ある日のこと、現代文で宿題が出された。内容は、オリジナルの物語を書いてこい、というもの。物語なんか教科書に載ってるものすら読まない俺が行き詰るのは、まぁ、当然の成り行きだった。というか、そんなもん、書けるか。そう思ったが、かといって投げ出すわけにもいかない。しょうがないから、俺は参考になるものを探しに近所の図書館に行くことにした。だが図書館にいるからといって突如文学の神が降りてくるわけがない。俺は再び頭を抱えることとなった。そんな折、ふと顔を上げると、近くの席に同じクラスのとある女子がいるのに気がついた。

彼女は、一言で言うと空白のような生徒だった。クラス全員の名前を挙げるときについ飛ばしてしまう。顔は出てくるのに名前は出てこない。いわゆるどこのクラスにもいる存在感がないやつで、年中教室で静かに本を読んでいた。誰かと話しているのを見た記憶もなくて、祭り事のときもひっそりと隅のほうにいるような、まぁ、そんな感じの生徒だった。

普段から本を読んでいる彼女ならば、きっと良い助言をくれるに違いない。そう思った俺は、ろくに話したこともないのに勢い込んで彼女に話しかけた。最初は呆気にとられていたようだが、俺の必死さが通じたのか、彼女は言葉少なに俺の頼みを聞き入れてくれた。

それから4日間、俺は彼女と図書館に通った。俺が馬鹿なことを言っては彼女は静かに笑った。質問をすると、その都度たどたどしくも適切なアドバイスをくれた。合間々々に他愛もない話もした。何を話したのかはもうほとんど思い出せない。ただ、その時間がやたら楽しくて、文才を絶賛したときの彼女の照れた笑顔が反則的なまでに可愛かったことだけは鮮明に覚えている。

彼女のおかげで、その宿題は人生上で一番良い評価をもらった。お礼を言おうと思ったのだがなんとなく照れくさく、その後俺が彼女と話すことはほとんどなかった。やがてクラス替え、高校進学と時がたち、俺の中の彼女に関する記憶は次第に薄れていった。

あれからもう4年が経ち、俺は一介の大学生になった。彼女とはまったく連絡を取っていないし、そもそも今どこの大学にいるかも俺は知らない。会えたらいいな、とは思う。けど積極的に会いたいとまでは思わない。何しろ、今となっては彼女の顔も名前もおぼろげになっている。それはきっと彼女のほうも同じだろう。

ただ、それでも。図書館で必死になってレポートを書いていると、ふと思ってしまうのだ。顔を上げると、俺の隣であの儚げで控えめな少女が微笑んでくれているんじゃないか、なんて。

A－7

8月6日

夏の朝。
僕は君を誘った。
もうすぐ、僕も行かなくてはならないから。
別に別れを言いにきたわけではない。
ただ、一緒に居たかった。
夏とは言え、早朝なのに蒸し暑い。
二人で海岸にそって散歩した。
気の向くままに歩いた。
何も考えず。何を話すわけでもなく。
適当に涼める場所を見つけそこで休んだ。
そこで君の持ってきてくれたおにぎりを食べた。
「そろそろ行かなくては」僕は、そう思い、立ち上がる。
太陽を見上げる。

突然、目の前が

『真っ白』

ただ、ひたすらにまぶしくて、まともに目をあけることもできない。
感覚もない。
一面真っ白だった。

夏の朝。
私はあなたと少しでも一緒に居たかった。
あなたはもうすぐ行かなくてはならないから。
けれど、そんなあなたが私は誇らしかった。
海岸にそって二人で歩いた。
何か話をしたわけでもないけど、それだけで良かった。
ちょうどいい影を見つけた。
そこであなた朝食をとった。
あなたがおいしいといってくれたのがうれしかった。
朝食を片付け、あなたは立ち上がる。
慌てて私は残りのおにぎりを無理やり口に押し込んだ。

になった。

気がつくと私は一人になっていた。
体が熱い。こげた匂いがする。
私はあなたを探した。
何かがすれる音がする。
私から何かがずり落ちた。
必死にあなたを探した。
けれど、あなたはどこにも居ない。
見つけたのはあなたの影。
私はそこから二度と動けなかった。

きっと私も溶けって影になる。
あれは私の未来を変えた。一瞬の

僕は、なんとなく理解した。
きっとこれが僕の未来。永遠の

「空白」

A-10

心のspace

私の心の中には今とてつもなく大きなspaceがある。宇宙が存在するなんて意味なんかじゃない。ただ、大きな隙間がある・・・それだけ。

このspaceは多分多くの人が持っているんじゃないかな。大きさは人それぞれだけどね。私の場合は小さなspaceがいっぱい集まって大きくなっちゃったんだ。

高3のときに先生が言ってた「今は苦しいかもしれないけど、終わって大学生になったら急に心に隙間ができてあの頃は満たされてたなぁなんて思うんだぞ」って言葉。自分は絶対そんな風にはならないって思ってたけど、やっぱり私の中にもできたよ。

でもさ、最近少しずつ私の中のspaceが小さくなりだしたような気がするんだ。しばらくの間毎日何か欠けてるような感じだったのに今では充実してる。ようやくこの大学で夢中になれることや自分の居場所を見つけられたからね。

現代の若者は夢や目標を持ってないとかよく聞くけど、夢中になれることがあったらいいんじゃないかな。夢中になれることが見つかるだけ幸せなんじゃないかな。夢とか目標なんて今夢中になってることから見つかることもあるんだしさ。今の時点で夢や目標がなくったっていいんだ。焦らなくても大丈夫。ただ、心の中に大きなspaceが残ったまま毎日を過ごさなければね。

A－11

ずっとそのままで

百葉箱はいつも僕らの集合場所だった
休み時間になるといつも友達と集まり
遊びはそこからはじまった
何か、凄いものか、怖いものがあるに違いない
白塗りの箱はそんな存在だった
地面から箱までのスペースは大切な物置だった
お菓子の箱や面白い形の石
何かの薬になると信じてお菓子のケースに詰めた雑草
次の日もあるかドキドキしながら教室にもどった

集合場所はいつの間にかグラウンドに変わった
ゴールを大きくそれたボールを追いかけたとき
そこには百葉箱があった
また違う“一年生”がそこで遊んでいた

「space」本選Ａブロック作品講評

１　今週の一言　6位　4ポイント

さらりと羽ばたかせた思い。
「一生に一度は」と歯を食いしばるような強い前置きを、２行めでふわりとほどく。その緩急の付け方があざやかでした。フォントを変えた心づかいも光る今週の表紙です。
イチオシフレーズ：「宇宙へ飛びたいなぁ」

２　宇宙　12位　0ポイント

そして、ほんとに宇宙へ。
果てしない広がりの謎に静かに思いを馳せつつ、すっと「こころ」に着地したカメラワークの切り替えが、とてもさりげなくて、さわやかな読みごこちです。

３　空いたスペース　6位　4ポイント

旬の話題から拾って。
ストライカーは、まさに勝負師。限られた瞬間にどれだけの凝縮した仕事ができるかで真価が決まる。そんな話題から学食席取り合戦へと展開して、友人同士の会話の親しみやすさが味わえました。
イチオシフレーズ：「学食で」×３　やはりここがツボですね。
惜しいに選んだ班も３つあって、今週の惜しい大賞受賞です。

４　宇宙からみても　2位　15ポイント

あーあ、何もそこで「理系女」にケンカを売らんでも、おニイさん。
とラストだけが読者を敵に回してしまいそうで残念でしたが、振られトークのポップな感じがていねいに演出されていて、とてもテンポ良く読めました。理系のリカちゃん、おめでとう。
イチオシフレーズ：「えっ・・・ごめん。私、カッコイイ人じゃないとちょっと・・・」×３　「これだから理系女は困る」　で、今週のイチオシフレーズ大賞も受賞です。

５　宇宙船地球号　10位　3ポイント

壮大な広がりを感じさせて、特にラスト１行「僕らは宇宙船

に乗って今日もゆく」と前向きなフレーズが好きでした。
　ただ、せっかくの故障発生のくだりが、うまく全体のトーンになじまなかった感。

6　うたかた　1位　27ポイント

　遠い遠い秋（な気がする）の思い出のとしょかん（ひらがな、な気がする）。
　思い出はそっとしておくから美しい。その儚さを少女の面影にきれいに重ねて、うん、きっといつか再会できるでしょう。
　でもって、いつの日か、赤ずきんちゃんにもすてきな出会いがありますよーに。首位(何度目でしょう）、おめでとう!!
　それにしても、ちょうどほどよく、みなさまのハートをくすぐったのでしょうかね。圧勝首位になるほどの作品かなあ、という気もするので、報告書に記載された各班の「うたかた」についてのコメントを全披露します。「甘ずっぱい青春」「いい話である。いいんじゃね」「空白感をとらえてる」「終わりがいい感じ、余韻が残っている、男の人と女の人の対比がよい」「うたかただなぁ」「とにかく丁度良い」「うつくしい」「さわやか」「モニョモニョ感がよし」「読みやすくて、わかりやすい」「懐かしむ感じがでてて凄くよかった」「同感」――以上です。

7　８月６日　2位　15ポイント

　運命の爆心地。
　悲劇を真正面からとらえて、特に上段左の「一面真っ白だった」のあとの空白が、みごとに効いています。言葉で「真っ白」「空白」と繰り返すより、この実際の空白に語らせた事実の重さのほうが、深く心に残りました。
　よって、さいごの「空白」はないほうが、突然に未来を絶たれた若人たちの悲劇をより強く感じさせることができたのでは。
　イチオシフレーズ：「空白」「溶けって」（核心場面の誤字は、ほんとに残念）

8　記憶　6位　4ポイント

　冒頭いきなり「この女」って、愛情が感じられないなあ。→改善案「横たわるのは」
　ラスト「その場を去った」って、そっけなくて愛情が感じられないなあ。→改善案「去る」
　最初と最後は、読者の印象を決定づける、ほんとにだいじなポイントなのでご用心。

で、なかみのほうは、突然にリセットされてしまった思い出への悲しみがピュアに綴られて、わかりやすいけれど、ありがちで、も少し個性が欲しかったか。

９　(無題）僕には大事な彼女が……　11位　1ポイント

彼女が続きます。いやでも分かれたのだから、冒頭「いた」では？
「空っぽの心/詰まった部屋」と、ラスト２行できっちりお題を、しかも二重の意味で消化したところに作者さんの律儀さを感じました。

１０　心のspace　5位　5ポイント

ちょっとspaceを散りばめすぎてうるさくなってしまった感があるけれど（それもまた理系的律儀さ？）、今まさに感じていることを誠実に語ったところが好印象。
燃焼しきった受験のあとで、また少しずつ何かを探し始めた気分が、すっと伝わってきます。

１１　ずっとそのままで　4位　8ポイント

百葉箱。なつかしい言葉の響き。
ボールとともにパンして見せたさいごのカメラワークが秀逸で、ひそかにイチオシの作品でした。
イチオシフレーズ：「ずっとそのままで」

１２　空白の７年間　6位　4ポイント

病院の白い空間は、これから二人でしあわせ色に染めてゆくためのはじまりの空間。
ちょっと抽象的なところが難ですが、その白いはじまり気分がういういしい今週の読み納めでした。